

南明政権における童氏案について (2)

滝野 邦雄

(2)

福王政権下でも、東林党の流れをくむ人たちと宦官派との党派的な対立が続いていた。そのため、反宦官派で清流を自認する人たちは、宦官派が政権の中心にいる福王弘光帝の政権と福王弘光帝自身に対して批判的であった。そこから、福王弘光帝は倫理的にも不誠実な人物であったため、童氏との関わりを否定しているのだと推測し、様々な流言をふまえて童氏のことを伝える。

ただ、福王弘光帝の「童氏」否定の発言は、明朝の制度に則ったものであった。そのため、明朝の制度と「繼妃童氏」が存在したこととの間になんとか整合性をとろうとする。あるものは福王府にいたものの正式の「妃」ではなかったとし、あるものは二人の出会いを洛陽福王府陷落以後に設定する。

具体的には、

談遷：福王弘光帝は即位した時、童氏が「妃」であったと認めていた。

查繼佐：福王弘光帝と関係のあった女性であるが、「妃」ではなく、周王府の宮人とする。

さらにまた、別の流言も紹介する。

黄宗羲：福王府において私通しただけで、正式の関係ではなかった。

錢澄之：福王府にいた時に「妃」となったというだけ。明朝の制度との整合性については触れない。

計六奇：福王府陷落後に「妃」となった。

陸圻：福王継承後に「妃」となった。ただ、「福藩の宮人」であったとか、「縫人」であったという説明も紹介する。

董含：「妃」であったとするだけ。明朝の制度との整合性については触れない。

徐鼎：後の咸豐十一年〔一八六一〕に成った『小腆紀年附考』で、「福王の妃」であったと認めるだけで、明朝の制度との整合性については無視する。

というものである。そこで、以下でそれぞれの説明を検討してみたい。

①談遷

談遷（原名は以訓，字は孺木・仲木，号は射父・觀若・容膝軒・江左遺民。浙江海寧の人。

明・萬曆二十二年〔一五九四〕～清・順治十四年〔一六五七〕は、『棗林雜俎』仁集・逸典・「童氏」条で、福王弘光帝は即位した当初、童氏が現れる前に、これまでに三人の妃を娶り、三番目が童氏であったと宰相に伝えたとし、つぎのようにいう。

童氏

上（福王弘光帝）始めて即位し、輔臣（宰相）に語^つぐるに先後娶る妃は三なるを以てす。時に母后を中州（河南）に訪^{たず}ね、宮眷（后妃）に及ばず。[そこで]御史の陳潛夫 河南に按たりて、童氏を以て至らしめんとし、有司 護りて京（南京）に入る。[童氏は]年 殆んど三旬なり。詐冒（妃をかたる）に坐して、錦衣の獄に下る。之を陳都督洪範（陳洪範）が云うを聞く。[それによると]、「童氏 獄中より上書（上申）し、『上（福王弘光帝）は』某年月日に我を娶る、某年月日に陛下（福王弘光帝） 出亡す。[その時]、衣^きる所は某色、飯する所は某品、出づる所は某地なり。又た手帕は妾（童氏）の手づから加うる所なり」云云と言う。此の書は緹帥の馮可宗 何れの状（上申書）と作すかを知らず。噫、蒙難（災難に遭遇する）の後、風塵（戦亂）に路を失い、童氏 身を保たざるなり。然れども宮中の一席の地を以て、綠苔埋愁し、唧怨（抱いた恨み）を清漏すれば足れり、何ぞ法吏（獄吏）の手に辱しめられ、衾^{ふしど}禍の羞を揚げるに至らんや。……童氏は、聖諭に「[陳] 潛夫 卧起（日常生活）を同じくし、我が絲綸（皇帝の命令詔書）を穢し、重ねて國體^{きぎ}を玷^{きず}つく」と曰う。夫れ事は其の真偽を論ず。偽なれば則ち死するも贖^{つぐなう}に足らず、徒だ加うるに汚褻（侮蔑）を以てす。此れ三家村（寒村）の訟師（三百代言）も爲さざる所なり。而して明旨（皇帝の命令書）より出づ。彼（福王弘光帝）の穢 相い無識（無知）にして、適たま自から其の陋を彰かにするなり（『棗林雜俎』仁集・逸典・「童氏」条）。

上（福王弘光帝）が即位した最初に、輔臣（宰相）に妃を三度にわたって娶ったと告げた。この時、太后鄒氏を河南に探したが、宮眷（妃）は探さなかった。そこで陳潛夫が河南で巡按御史の任に当たっていたので、童氏を行かせようとし、役人たちは護衛して南京に送り届けた。童氏は三十歳ほどになっていた。妃を偽称したということで、錦衣衛の監獄に入れられた。私（『棗林雜俎』の筆者の談遷）は、都督の陳洪範さまがこのことを以下のようにおっしゃるのを聞いた。それは、「童氏は獄中より上申し、『陛下（福王弘光帝）は某年月日に妾（童氏）を娶られた。某年月日に陛下（福王弘光帝）は脱出された。その時のお召し物は某色で、某をお食べになり、某地に出て行かれた。さらにそのハンカチは、妾（童氏）が手づからお渡ししたものです』などなど」というものであった。この上申書について、取り調べに当たった緹帥の馮可宗は、どうした形式の書類にして提出したらいいのか分からなかった。ああ、災難に見舞われた後、戦乱で行く道に迷い、童氏は自分自身を保全できなかった。しかし、宮中のちょっとした居場所で生活させ、恨み言を水時計のように僅かずつでも漏らせるようにさせれば、それで足りたのである。どうして獄吏の手にかけ、衾^{ふしど}禍の羞まで示すことになってしまったのだろうか。童氏について、聖諭では、「陳潛夫は、童氏と日常生活を一緒にし、我（福王弘光帝）の絲

綸（詔書）で出された命令を穢し、重ねて國體をも傷つけた」と言う。そもそもこの事案は真偽を論ずるものである。偽りであれば命を以て贖罪すれば充分である。それに侮蔑するような文言を加えるのは、僻地の三百代言であっても行わないようなことである。それなのに、皇帝の聖旨にこうした文言が書かれている。彼（福王弘光帝）の醜行は、無知からくるものであり、ここにその不見識がはっきり示されている、という。

さらに童氏は三人目の「繼妃」であつたという立場から、談遷は『國權』においても、つぎのように記す。

〔弘光元年（順治二年）三月丙申（十三日）〕故の妃童氏 錦衣衛の獄に下る。上（福王弘光帝） 初め徳昌王に封ぜられ、黄氏を娶るも、早に薨す。繼は李氏なり。再び繼ぎは童氏なり。王妃に封ぜらる。嘗て子を生むも育たず。洛陽^{せめおと} 陷され、民間に逃れ、上（福王弘光帝）と相い失う。久之、前の巡按御史の陳潛夫 「妃は故より在り」と奏すも、〔福王弘光帝は〕、之を問わず。遂に〔童氏は〕 自から巡撫の越其杰の所に詣る。上（福王弘光帝） 善しとするなきなり。〔陳〕 潛夫 外艱（服喪）もて去り、道中 童氏を以て至る。上（福王弘光帝） 納れず、獄に下す。都督の馮可宗 其の病むを言え、猶お之を善視（充分な待遇を加える）せよと命ずるがごとし。已に拶指（手をつめる刑具を用いた拷問）す。〔童〕 氏 因りて奏して「往時、某月日に始めて婚す、某月日に城（洛陽）^{せめおと} 陷され、妾（童氏） 饌（食物）を具え、帕を奉（進獻）じて上（福王弘光帝）の^{あた}首を^{つつ}褻む。〔福王弘光帝は〕 墻を踰えて逃る。今、遂に我（童氏）を忘れたるか」と述ぶ。〔馮〕 可宗 屏（陰蔽）して奏せず。時に中外に諭して謂う、「陳潛夫 〔童〕 氏と臥起（日常生活を共にする）す。又た〔馮〕 可宗 孀婦（産婦）をして〔童〕 氏^{むすめ} 女を産むと誣る。俱に〔福王弘光帝を〕 汚褻（侮る）にして實を失う」と。則ち馬士英 順旨（事実を曲げて迎合する）するの罪（罪をなすりつける）なり（『國權』 卷一百四・「弘光元年（順治二年）三月丙申（十三日）」条・六一九五頁：拙稿では、張宗祥が校點し、中華書局によって一九八八年第二次印刷（一九五八年第一版発行）された活字本を用いる）。

弘光元年（順治二年）三月丙申（十三日）に故の妃童氏を錦衣衛の牢獄に入れた。上（福王弘光帝）は、初めは徳昌王に封ぜられ、黄氏を娶ったものの早くに亡くなり、後添いに李氏を娶った。その次が童氏である。〔童氏は〕王妃に封ぜられた。以前、子供を生んだが育たなかった。王府の洛陽が陥落し、民間に逃れ、上（福王弘光帝）と離れ離れになった。久しくして、前の巡按御史の陳潛夫が、「妃がもとよりいらっしゃいます」と奏上した。しかし、福王弘光帝は問い合わせもしなかった。〔童氏は〕とうとう自分から巡撫の越其杰のところに行った。上（福王弘光帝）は善しとしなかった。陳潛夫は喪に服するため帰郷し、道中この童氏を伴って行った。ところが、上（福王弘光帝）は童氏を認めず、獄に下した。都督の馮可宗が、童氏が病氣であると伝えれば、指示して充分な待遇を加えさせるかのようであった。とうとう自供させるために手をつめる刑具を用いた。すると童氏は、「むかし某月日にはじめて婚姻しました。某月日に

洛陽が陥落し、妾（童氏）は食べ物を整え、ハンカチを差し出して上（福王弘光帝）の頭をお包みし、城壁を乗り越えて逃げました。今になって、私（童氏）をお忘れになったのでしょうか」と述べた。馮可宗は隠蔽してこのことは上奏しなかった。この時、内外に「陳潛夫は、童氏と起居をした。また、馮可宗は産婦を利用して童氏が娘を生んだと偽りを申し立てた。兩人ともに上（福王弘光帝）を侮り軽んじ、事実とは異なっている」という論が出された。これはすべて馬士英が「福王弘光帝の童氏が妃であったことを認めたくないという気持ちに」迎合して罪をなすりつけたのである、という¹⁾。

談遷によると、童氏は福王府のあった洛陽で「繼妃」李氏に続いて「妃」となったという。また、童氏の自供の内容についてもいろいろと付け加えられるようになる。

また、『國榷』巻一百四・「弘光元年三月丙午（二十三日）」条では、藩鎮の劉良佐から、偽太子（王之明）と童氏の事案の処理は世論の望みに沿っていないので、穏便な処分を願いたいとする奏上に対して、つぎのように旨が出されたという。

丙午（二十三日）……廣昌伯の劉良佐 奏すらく「王之明及び童氏の兩案は、未だ輿論に協わず。兩朝（福王弘光帝と崇禎帝）の彝倫（道理）を曲全（不満足ながら丸く収める）せんことを懇求す」と。旨有りて「童氏は妖婦にして、朕（福王弘光帝）の結髮（元配）

- 1) この「弘光元年（順治二年）三月丙申（十三日）」条の最後に、談遷は、童氏は福王弘光帝の妃であったとしたうえで、つぎのようなコメントを附している。

談遷 曰く、古者 宮人は外（後宮に対する朝廷）にせず。譴責（叱責）有りとも雖も、俱に内庭（内裏）に於いてす。縣官（後宮に対する朝廷）固より童氏に薄（寛大でない）なり。然れども陆危（危うくなる）の時に方り、其の身の恤（あはれ）まず、寧ぞ其の内を顧みんや。窮鳥 人に依り、簪履（昔なじみ）を起念するに迫れば、之を以て「蘋蘩荇菜の祭」を主とさせん。或いは其の倫に非ざれば、深宮の一席の地に至し、坐して白頭（年寄りになること）を詠ぜしめん。何の不可なる所ならんや。又た然らざれば、掖庭の祕獄、其の事 流聞（いずくん）せざるなり。貴陽（馬士英）寡昧（無知）にして、穢を中外に宣し、司隸校尉をして妄りに後鉤（後添え）を汙（けが）せり。其の罪 誅するに勝う可きか（『國榷』巻一百四・「弘光元年（順治二年）三月丙申（十三日）」条・六一九六頁）。

①蘋蘩荇菜之祭：「蘋蘩菹藻之菜」の誤記か。『左傳』隱公三年傳には「苟有明信，澗澨沼沚之毛・蘋蘩菹藻之菜・筐筥錡釜之器・潢汙行潦之水，可薦於鬼神。可羞於王公。而況君子結二國之信。行之以禮。又焉用質。風有采芣。采蘋。雅有行葦。沔酌。昭忠信也（苟し明信有れば，澗澨沼沚の毛・蘋蘩菹藻の菜・筐筥錡釜の器・潢汙行潦の水も鬼神に薦む可し，王公に羞む可し……）：もしも明信さえあれば，澗澨沼沚の毛（谷間や沼の草）・蘋蘩菹藻の菜（浮草藻草の類）・筐筥錡釜の器（ざるや釜の類）・潢汙行潦の水（雨の後のたまり水）[のような粗末なお供え物]であっても神にささげることができるし，王侯にも進め供することができる……」とある。

むかし宮人は外（後宮に対する朝廷）とかかわらなかった。叱責するようなことがあっても，すべて後宮で行なった。縣官（後宮に対する朝廷）は，もともと童氏を誠実で寛大に取り扱わなかった。しかし危うくなってくると，自分の身をあわれまず，どうしてその内（福王弘光帝）のことを気遣うであろうか。窮鳥が頼ってきて，以前のなじみを思い出すことになれば，そのなじみに蘋蘩荇菜の祭のような粗末なお供え物をつかさどらせたようなことをさせればいい。あるいは「福王弘光帝と」関係がないのならば，大奥のある場所に置き，そのまま時間をすごさせればいい。[こうしたことが] どうしてできないことがあるのか。またそうでなければ，この童氏の案件は，後宮の秘密であり，その事は広まらなかったはずである。貴陽（馬士英）は無知蒙昧で，醜聞を内外に広げてしまい，犯罪を取り締まる司隸校尉の役人を使って妄りに後鉤（後添え）を穢した。その罪は誅するに値すべきものだ，というのである。

を冒(詐称)す。朕(福王弘光帝) 初めは郡王爲り。何ぞ東西の二宮有らん。供(尋問調書)に據るに係れ熙陵王^①の宮人なり。[しかし] 尙お未だ眞偽を悉さず。王之明は、駙馬^{つば}の王昉の姪孫にして、難を避けて南來す。[そして] 高夢箕の家人の穆虎と沿途(道中) 狎昵(親しむ)し、東宮を冒認(詐称)し、妄りに不軌を圖る。正に嚴究に在らん。朕(福王弘光帝)と先帝(崇禎帝)とは素より嫌怨(怨恨)無し。已むを得ず、群臣の請に従いて、勉めて重寄(重大な申出)を承く。豈に天下を利するの心有りて、其の血胤を毒害(殘害)せんや。但だ先帝(崇禎帝)の遺體(忘れ形見の皇子)は、異姓の頑童を以て溷亂(混亂)する可からず。朕(福王弘光帝)の宮闈(后妃)は風化の關する所なり。豈に妖婦の闖入を容さんや。法司 即ち情節(自称太子事案と童氏事案の経過)を示し、以て群疑を息(消す)せよ(『國權』卷一百四・「弘光元年三月丙午(二十三日)」条・六一九八頁～六一九九頁)。

①熙陵王：錢澄之の「南渡三疑案」では、「熙寧王」に作る。いまのところ「熙陵王」・「熙寧王」とともに該当する王族は見出せない。顧炎武『聖安皇帝本紀』でいう「邵陵王」(太祖洪武帝の第五子の周定王朱橚の子孫)のことかもしれない。

三月二十三日、藩鎮の劉良佐から、「自称太子の王之明と自称妃の童氏のふたつの事案の審理は、いまだに世論の求めになっておりません。福王弘光帝と崇禎帝のふたつの御代にかかわる彝倫(道理)を不満足ながら丸くお収めになることを願い奉ります」と奏上があった。それをうけて、「童氏は妖婦である。朕(福王弘光帝)の先の妃であると詐称している。朕(福王弘光帝)は、始めは郡王であった。どうして東西の二人の正妃がもてたのか。自供によると「熙陵王の宮人です」とあるが、いまなおその眞偽を尽くしていない。王之明は、駙馬の王昉の姪孫であって、避難して南にやってきた。そして、高夢箕の家人の穆虎と道中で親しくなり、東宮を偽称し、叛逆を企てた。厳しく追及したい。朕(福王弘光帝)と先帝(崇禎帝)との間には、不満や恨みなどなかった。やむをえず、群臣の帝位につけとの重大な申出を了承したのである。どうして天下の利益になるというような気持ちをもって、その血筋に危害を加えるだろうか。ただ先帝(崇禎帝)の忘れ形見は、異姓の児童に乱されるべきではない。朕(福王弘光帝)の後宮は教育感化にかかわるところである。どうして妖婦の乱入を許容できるだろうか。こうしたことから、司法はただちに自称太子事案と童氏事案の経過を示して様々な疑惑を止めよ」との旨がくだされた、という。

藩鎮の劉良佐から自称太子の王之明と自称妃の童氏の審理の再考を促す奏上があり、福王弘光帝は、両事件の取り調べの経緯をはっきり示し、疑惑を収めるように命じた、というのである。

②査繼佐

査繼佐（字は伊璜，通称は東山先生・樸園先生。浙江海寧の人。明・萬曆二十九年七月初四日（西暦：一六〇一年八月四日）～清・康熙十五年正月二十日（西暦：一六七六年三月四日））の『罪惟録』では、童氏は周王府の宮人であり、南方に避難する途中の福王弘光帝に尉氏縣で出合い、四十日間過ごしたという。

安宗簡皇帝（福王弘光帝）は顯皇帝の孫、福王常洵の世子（世継ぎ）なり。名は由松（由崧）。福王（朱常洵）初めて懷慶に封ぜられ、[その後]河南に遷る^①。崇禎十四年、賊[李]自成河南を陥れ、王（朱常洵）難を被る。尚書の呂維祺・承奉の崔升^②之に死す。世子（福王弘光帝）宮眷を以て裸で懷慶に奔る。懷慶陥れらるるに及び母の鄒太妃及び繼妃李氏と出奔す。半道にして失い、單身にして潞王の衛輝に依る。甲申（崇禎十七年）三月、[崇禎]帝社稷に殉じ、衛輝も復た守られず。世子（福王弘光帝）潞王（朱常淦）に隨いて南奔し、尉氏[縣]に憩い、周王の故の宮人の童氏に遇う。呼（命じる）して逆旅を共にし、尉氏に客たる者、四十日なり。童氏 娠有り。富貴となれば忘るること勿れと誓う。已にして胎 舉らず、輿に許州に奔り、母太妃に遇うを得。而れども李氏 竟に失う。尋いで劫を被り、世子（福王弘光帝）許[州]を棄て復た南奔し、太妃・童氏 再び失う。夏四月、[福王は]潞[王]・崇[王]の二王及び周[王]の世孫と共に淮上に棲む・・・（『罪惟録』附紀卷之十八・安宗簡皇帝）。

①福王朱常洵の王府は最初から河南洛陽にあった。懷慶府には、正統八（九）年から崇禎十三年まで洪熙帝仁宗の第二子を始祖とする鄭王府があった。洛陽王府が陥落してから、福王弘光帝が懷慶府に避難したことから、記述に混乱が生じたかもしれない。なお、康熙『懷慶府志』（卷之五・宦蹟・明・「史東昌」条・六十葉）に「[史東昌は] 蔚州（山西蔚州）の進士（萬曆二十六年戊戌科（一五九八）三甲二百九名の進士）なり。懷慶府に知たり。時に福王（朱常洵）將に國（洛陽府）に之^こかんとし、道懷[慶府]を経。公（史東昌）の茲土を守るを得、竟に騒動する所無し・・・」とあり、福王朱常洵のお国入りに際して、懷慶府を通過したが、知府の史東昌の適切な処理のおかげで騒動が起らなかった、と記されている。

②呂維祺・崔升：呂維祺は洛陽が陥落し捕虜になり、流賊を罵り殺される。崔升は、殺害された福王の遺体につき従い離れなかったという。拙稿「北来太子案を通して見た福王弘光帝について（2）」（『経済理論』第385号）参照。

安宗簡皇帝（福王弘光帝）は顯皇帝（神宗萬曆懷慶帝）の孫、福王朱常洵の世子で、名は由松（由崧）である。福王弘光帝の父の朱常洵は、はじめ懷慶府に封ぜられたが、その後に河南（洛陽府）に転封となった。崇禎十四年、流賊の李自成が河南（洛陽府）を陥れ、福王（朱常洵）は亡くなった。もとの南京兵部尚書の呂維祺や承奉（召使い）の崔升も亡くなる。世子（世継ぎの福王弘光帝）は、妃を連れて身ぐるみを剥がれて懷慶に逃げた。懷慶が陥落すると母の鄒太妃と繼妃李氏と逃げ出す。途中で離れ離れとなり、独り身で潞王（朱常淦）の王府のある衛

輝を頼った。崇禎十七年、崇禎帝が国に殉じ、衛輝も陥落した。世子（福王弘光帝）は、潞王（朱常潞）につき従って南に向かい、河南尉氏縣で休息をとり、周王の宮人であった童氏と出会った。世子（福王弘光帝）は、宿を共にするように命じ、尉氏縣に滞在すること四十日であった。童氏は妊娠し、富貴の身となれば忘れることがないようにしようと誓った。そうこうして子供は育たず、一緒に許州に逃げた。そこで、母の鄒太妃に出会うことができた。しかし繼妃の李氏は見つからないままであった。許州も襲われたので、世子（福王弘光帝）はまた南に逃げ、母の鄒太妃と童氏と再びはぐれてしまった。四月になって、福王弘光帝は潞王・崇王の二王と周王の世継ぎのお孫さんと淮河のほとりにとどまった、という。

査繼佐は、童氏が福王弘光帝の「繼妃」であるとしない。周王の宮人であり、福王弘光帝と避難場所の尉氏縣で四十日過ごしたとするのである。

また別に、査繼佐は、『罪惟録』（志卷之三十七上・外史・妃嬪逸・「童妃」条）において、童氏を「嫡妃」であり、福王弘光帝は替え玉であったという流言も伝える。

童妃は、福王の長子由松（由崧）の嫡妃なり。時に未だ世子の妃と稱せざるなり。是れより先、崇禎甲申（崇禎十七年）、福府 賊の躰及する所を被り、[福]王常洵 慘死す。世子由松（由崧）・由松（由崧）の弟の由栢（朱由桀）所を失い、眷屬 星散（四散）し、各々相い顧みず。世子（朱由崧：福王弘光帝）福[王府]の寶を攜えて淮上に奔り、巡撫の馬士英及び各鎮 南都に擁し之を立つ。已にして鎮臣の劉良佐と巡撫の越其傑・巡按の陳潛夫 皇后童氏を奉じて南都に入る。[しかし]詔有りて廷謁を許さず、指して妖婦と爲し、詔獄[に入れる]とす。[陳]潛夫 不敬に坐し、亦た併せて見收さる。鎮臣等は免議さる。余（査繼佐）曾て[陳]潛夫に晤うに、[陳潛夫は童氏について]云う、「童氏 自から世子由松（由崧）の嫡妃と叙べ、情實（実情） 鑿鑿（はっきりする）たり。一時（一時的な）の輿從（車馬の扈從）や「妃」と尊稱（尊称で呼びかける）するも亦た宴受（普段通りに受けいれる）し、慚慙（羞じること）無し。遂に以て南歸す」と。余（査繼佐）時に心に疑うこと甚だし。上（福王弘光帝）既に顧みること勿れば、即ち賜見（謁見）すれば可なり。見えて之を閑置（別の場所に置く）すれば亦た可なり。何ぞ斥けて「妖婦」と爲すに至らん。「妖婦」とは、媚術を挟みて世を惑わすの稱なり。道に遇うの宮人（童氏）と合わず。即ち誤りて一宮人を進む、罪無かる可し、兩つの詔獄（童氏案と偽太子案）胡をか爲さん。且つ童[氏]の草奏 縷縷（詳細）たり。錦衣の馮可宗 之を訊得するに、皆な宮中の事、民間の能く與り聞く所の者に非ず。搶呼（頭を地に打ち付ける）擲地（地に身を投げ出す）し、嗚咽すること甚だしくして曰く、「願わくは至尊を望見するを得て、一言して死せん」と。最も關切（關係が密切）なるに匿ざれば、情 此に至らざらん。而して上（福王弘光帝）奏を得るも、一つも省視（点検）せず、直ちに之を地に抵す。又た胡をか爲さん。或いは云う、上（福王弘光帝）初め元後の李[氏] 已に故（亡くなる）すと稱し、才めて蘇・杭の佳麗を窮採せんとす。[だから]、復た念舊（かつての妃を氣に

かける)せず」と。果して爾らば、他故に託して之を廢(捨てる)す。古の不誼(不義)の主、亦た往往にして然る有り。必ず一たび山龍(天子の服)を睥せしめざるは、何ぞや。壬子(康熙十一年：一六七二年)に至り禾(江西吉安府)に在りて、南中の錢秉鐙に晤うに、言う「童氏は實に世子由松(由崧)の嫡妃なり。竟に世子の南面の隆重を得るを以て、而して故人を棄つ。[童氏は]大いに飲恨(恨みを忍ぶ)を爲す。其れ實に世子由松(由崧)出亡(逃亡)し、弟の由栢(由桀)遺寶を獲て遂に自から世子と稱し倖立す。童氏路に逐に知らず。即ち初めて擁戴する諸文武も故より知らざるなり。詔もて童氏の訊に就くは、鄒太后之を知り、閣部の馬士英も之を知ればなり。諸々の在廷故より知らざるなり。李氏は或いは即ち由栢(由桀)の元配ならん。路に之を洩らすを恐れ、遂に「李氏道に失わる」と云う。即ち失わざるも亦た竟に失うなり……(『罪惟錄』志卷之三十七上・外史・妃嬪逸・「童妃」条)。

童妃(童氏)は、福王の長子朱由崧の「正妃」である。その時にはまだお世継ぎの「妃」とは言われていなかった。これより前、洛陽福王府は流賊によって踏みにじられ、朱由崧(福王弘光帝)の父の福王朱常洵が悲惨な最期をとげた。世継ぎの朱由崧とその弟の由栢(朱由桀)は行き場を失い、まわりの者は四散し、お互いを顧みなかった。朱由崧(福王弘光帝)は、福王府の宝物を携えて淮河に逃げ、巡撫の馬士英や各藩鎮が南京で皇帝に擁立した。そうこうして、藩鎮の劉良佐と巡撫の越其傑²⁾と巡按の陳潛夫が「皇后童氏」を奉じて南京にやってきた。しかし詔が出され拝謁を認めず、童氏を「妖婦」として、詔獄に入れた。また、お供をしてきた陳潛夫を「不敬」罪とし、一緒に収監した。藩鎮の劉良佐たちはお咎めがなかった。私(査繼佐)は、以前この罪に問われた陳潛夫に出会った。陳潛夫は童氏について、「童氏は自分からお世継ぎ朱由崧さまの「嫡妃(正妃)」であると言い、実情ははっきりとしたものでした。一時的に行なった車馬の扈從や「妃」と尊称で呼びかけたことなど、普段通りに受けいれて、恥ずかしがってはおりませんでした。そこで南京に連れてまいりました」と言った。ところが私(査繼佐)は、その時心の中でたいそう疑問に思った。上(福王弘光帝)は、童氏にたいする気持ちがないのなら、謁見すればそれでよかった。謁見した後に、別の場所に移せばまたそれでよかった。どうして追い払って「妖婦」とするようなことまでしてしまったのだろうか。「妖婦」とは、媚術を利用して世間を惑わすの意味である。道中で出会っただけの宮人(童氏)にはその言い方はそぐわない。ただ誤ってひとりの宮人を送り届けただけである。罰すべきではないのではないか。兩つの詔獄(童氏案と偽太子案)は勝手に無茶苦茶なことをするようなものである。そのうえ、童氏の上奏文はきわめて詳細であった。錦衣衛の馮可宗がこれについて質したところ、すべて宮中の事であり、民間のよくあずかり知るところのものではなかった。童氏は、頭を地に打ち付け、体を地に投げ出し、ひどく嗚咽して、「天子さまを遠くから拝見し、一言申し上げて亡くなりたくないと願っております」と言った。関係が密接でなければ、気持ちはこのようになりようがないではなかろうか。それなのに、上(福王弘光帝)は上申文を示されても、

少しも見て点検しようともせず、直ちに地面に投げつけた。また勝手に無茶苦茶なことをするものである。あるいは、[上(福王弘光帝)は最初にもとの妃の李氏がすでに亡くなったといい、そして蘇州・杭州の佳麗を探し出そうとした。だから、以前に関係のあった者を気に掛けなかったのだ]という。果たしてそうであるならば、別の理由から童氏のことを捨て去ったのである。古の不誼(不義)の主君は、また往々にしてこのようなものである。しかし、必ず天子の服を見せなかった(謁見をみとめない)のは、どうしてなのだろうか。[その理由として]壬子(康熙十一年：一六七二年)になり禾(江西吉安府)で南中の錢秉鐙に面会したところ、つぎのようにいう。「童氏は実際に世子由崧の「正妃」である。それで世子由崧が天子の位を得たことから童氏を捨て去った。童氏はたいそう恨みに思った。その実、世子由崧は逃げ去ってしまい、弟の由栢(朱由槩)が残された証拠の宝を得て、みずから「世子由崧」を名乗り、幸運にも擁立されたのである。童氏は道々そのことを知らなかった。推戴した諸々の文武の官僚も知らなかった。また、童氏を尋問するようという詔が出されたことは、鄒太后は知っており、閣部の馬士英も知っていた。ただ、朝廷の臣はもとより知らなかった。[童氏の前の妃であった]李氏は、あるいは弟の由栢(朱由槩)のもともとの妃であり、道々で弟の由栢(朱由槩)が兄に成り代わったことを漏らされるのを心配し、とうとう「李氏は道中行方知れずになっ

- ✓ 2) 道光『貴陽府志』(卷七十三・明耆舊傳一・明諸越傳第七・「越其傑」条・二十九葉～三十葉)によると、越其傑の人となりは、

〔越其傑は〕字は卓凡、一字は自興、性は偶儻、騎射を善くし、詩文も亦た超越して奇氣有り(道光『貴陽府志』卷七十三・明耆舊傳一・明諸越傳第七・「越其傑」条・二十九葉)。

というものであった。萬曆三十四年(一六〇六)の郷試で舉人となり、天啓年間に四川夔州府同知となる。奢崇明の叛乱の鎮圧に尽力する。その功績で僉事に升る。しかし上官と意見が合わず去ってしまう。また監軍となるが、「上官と齟齬ありて職を去る」。使監貴州討賊軍の監督を命ぜられ、つづけて霸州備兵、そして鳳陽監軍となるが、「事を以て論戍」される。福王政権の時に、登萊巡撫となる。そして、陳潛夫が周王を奉じて杞縣に起兵して、官員の派遣を要請してきたので、越其傑が崇禎十七年八月十七日に河南巡撫に任ぜられる。

・・・福王の時、僉都御史・巡撫登萊に起こされ、尋いで河南に改めらる。時に陳潛夫 周王を奉じて杞縣に起兵し、「西平塞の副將の劉洪起 賊の偽巡撫の梁啟隆を撃走し、河を渡りて賊將の陳徳を柳園を破る」と説き、露布(告捷文書)を傳えて、吏を南京に請う。故に〔越〕其傑を用いて〔河南〕巡撫と爲す。而して〔陳〕潛夫を以て巡按と爲す(道光『貴陽府志』卷七十三・明耆舊傳一・明諸越傳第七・「越其傑」条・三十葉)。

翌年、藩鎮の高傑が許定國に殺害され、清政権に帰順すると、逃げ出して行方知れずとなったという。

順治二年、總兵の高傑 河南の開歸より中原を取らんことを謀る。歸徳に至り、許定國 子を遣りて輸欵(投誠)するの事を聞(告げ知らせる)す。乃ち〔許〕定國を招きて往會せんとするに、〔許〕定國赴かず。〔高〕傑 乃ち〔越〕其傑をして〔許〕定國に睢州に就(赴)くを邀む。〔河南巡撫が来たので、許〕定國 已むを得ず郊迎す。〔越〕其傑 〔高〕傑に入城すること勿れと勸む。〔高〕傑 〔許〕定國を輕んじ聽かず。遂に〔許〕定國の襲殺する所と爲る。〔許〕定國 遂に大清に歸順す。〔越〕其傑 走げて終わる所を知らず・・・(道光『貴陽府志』卷七十三・明耆舊傳一・明諸越傳第七・「越其傑」条・三十葉)。

なお、『明史列傳』(康熙五十三年上呈)には、何に基づいたのか分からないが、同郷の馬士英の「姻婭(婚姻関係を通じた親戚)」と記される(『明史列傳』列傳第一百五十二・「陳潛夫」条・十八葉)。

た」といった。すなわち、離れ離れにならなかったが、とうとう行方知れずにしてしまったのである、という。

童氏を正式の妃だと認めたくて、福王弘光帝が薄情であったため、童氏を認めようとしなかったという。さらに別の流言として、弘光帝として即位したのは、福王由崧ではなく、弟の由栢（朱由桀）であった。そのことを漏らされるのを恐れたため、童氏を否定したとも伝える。福王替え玉説は、林時對の「南都三疑案記」など幾種類かの史料が伝えている。ただし、『國榷』によれば、福王由崧の弟の朱由桀は、洛陽府の陥落する二か月前の崇禎十三年十一月二十五日（西暦：一六四一年一月六日）に亡くなっている。

〔崇禎十三年十一月壬寅（二十五日）〕福世子由桀 薨³⁾（『國榷』卷九十七・「思宗崇禎十三年十一月壬寅（二十五日）」条・五八八二頁）。

③黄宗羲

黄宗羲（字は太沖，号は梨洲。浙江餘姚の人。明・萬曆三十八年（一六一〇）～清・康熙三十四年（一六九五）。明の諸生の『弘光實錄鈔』（順治十五年（一六五八）序）になると、当時の流言を書き込んで、童氏についてつぎのように伝える。

〔弘光元年（順治二年）四月癸丑（一日）〕錦衣衛の〔馮〕可宗・秉筆太監の屈尚忠 假后童氏を會審す。

是れより先，帝（福王弘光帝）藩邸に在り。賣婆童氏と其の女 府中に入出する有り。帝（福王弘光帝）其の女と私通す。〔その後〕，帝（福王弘光帝）の即位するを聞き，自

3) 乾隆十年重修『洛陽縣志』には、

〔福王の〕二子の潁上王由桀〔福〕王（福王常洵）と同じく洛〔陽〕に遇害さる（乾隆十年重修『洛陽縣志』卷之二・地理分封・「福恭王常洵」条・十七葉）。

とある。

後の編纂である『小腆紀傳補遺』（『小腆紀傳』の撰者の徐鼎之子の徐承禮による増補：光緒十三年跋）も、潁王由桀，福恭王（常洵）の次子，弘光帝の弟なり。萬曆中，潁上王に封ぜらる。崇禎十四年，闖賊河南を陷し，〔父親の〕恭王（福王常洵）と同じく遇害さる。南都 立ちて，「潁王」に追封され，諡して曰「沖」と曰う（『小腆紀傳補遺』卷一・列傳・宗藩・「潁王由桀」条）。

と記している。洛陽陥落の二か月前に亡くなったことが，洛陽陥落の時に亡くなったと誤解が生じる原因となったのだろうか。

なお，福王由崧の弟の朱由桀の陵墓は，順治『河南府志』によれば、

福忠王墓 縣の西北十五里の金水河上崖に在り（順治『河南府志』卷之二十二・陵墓・「洛陽縣」条・八葉）。

とあり，乾隆十年重修『洛陽縣志』によれば、

福忠王墓 王名は由桀。地理・分封に見ゆ 縣の西北十五里の金水河上崖に在り（乾隆十年重修『洛陽縣志』卷之二・山川・葬・「福忠王墓」条・十三葉）。

とある。

から稱して后と爲す。民間も亦た后を以て之を目(待遇する)す。河南巡按御史の陳潛夫 臣と稱して謁し、其の應對 瞻敏(語彙が豊富で、機転が利く)なるを見て、亦た遂に心折(感心する)す。[そこで、陳潛夫と]巡撫の越其傑と[が童氏を]送りて南京に至らしむ。而して太后 其の入るを容さず。旨有りて、「朕(福王弘光帝)の元配は黃氏なり。先朝 冊封す。不幸にして夭逝す。繼配は李氏なり。[洛陽が陥落した時に]殉難す。俱に已に后號を追封し、天下に詔諭す。童氏は何れの處の妖婦なるかを知らざるも、朕(福王弘光帝)が躬の結髮(妻子)を冒認(詐称)す。即ち旨に^{したが}違いて嚴刑とし、來歴并せて主使撥置(首謀してそそのかす)の人を訊問(取り調べる)せよ」と。三月二十八日、童氏 墮胎もて申報(上級機関に申(上申文)を提出して報告する)す。帝(福王弘光帝)益々之を恥ず。[そして陳]潛夫 私に妖婦に謁し、人臣の禮無き^①を以て、逮問(逮捕して罪に問う)す(『弘光實錄鈔』卷四・「弘光元年(順治二年)四月癸丑(一日)」条)。

①人臣の禮無し：東方朔の「非有先生論」(『漢書』(東方朔傳)・『文選』(卷五十一・論一)所引)に「昔者關龍逢深諫於桀、而王子比干直言於紂、此二臣者、……直言其失、切諫其邪者、將以爲君之榮、除主之禍也。今則不然、反以爲誹謗君之行、無人臣之禮(昔者 關龍逢は、桀を深く諫め、王子比干は紂に直言す。此の二臣は、……其の失を直言し、其の邪を切諫するは、將に以て君の榮と爲し(主君の譽を盛んにする)、主の禍を除かんとすればなり。今は則ち然らず、反て以て君の行いを誹謗し、人臣の禮無しと爲す)」。

これより前、帝(福王弘光帝)が藩邸にいた時、賣婆(人の家に入出りし物品の売り買いをする女性)の童氏とその娘が藩邸に入出りしていた。帝(福王弘光帝)はその娘と通じた。その後、帝(福王弘光帝)が即位したと聞き、みずから皇后と称した。民間でも、その女性を皇后として取り扱った。河南巡按御史の陳潛夫は、「臣」と称してその女性に拝謁し、その対応するのに語彙が豊富で機転が利くのを見て、とうとう感服してしまった。そこで陳潛夫と巡撫の越其傑とは、その女性を送り南京に届けた。しかし、太后(福王弘光帝の父親の福王(朱常洵)の妃の鄒氏)は、その女性が宮中に入るのを聞き入れなかった。そして、帝(福王弘光帝)が指示を出して、「朕(福王弘光帝)のもともとの妃は黃氏であり、先代において冊封を受けている。ところが不幸にして早世した。繼妃は李氏で、洛陽が陥落した時に自殺した。二人ともすでに皇后の位を追封し、天下に詔諭した。童氏はどこの妖婦であるかはわからないが、朕(福王弘光帝)自身の妃だと詐称している。そこで、旨(福王弘光帝の指示)に従って嚴刑とし、その來歴とこの事案を首謀してそそのかした人物も取り調べよ」とした。三月二十八日には、この女性(童氏)が墮胎したと上申文が提出されてきた。帝(福王弘光帝)はますます恥じて、陳潛夫が勝手にこの妖婦(童氏)に謁見したのは、下臣としての礼儀を欠いているとして、逮捕して罪に問うた、という。

黄宗羲は、福王弘光帝が藩邸(郡王)であった時、賣婆(人の家に入出りし物品の売り買い

をする女性)の娘の童氏と私通した。その童氏が、福王弘光帝の即位を聞いて皇后と称した。それを信用した河南巡按御史の陳潛夫と河南巡撫の越其傑が南京に送り届けたものの、福王弘光帝によって否定された、と伝える。黄宗羲は、童氏は「后」に封ぜられてはいないが、福王弘光帝と関係があったために、「后」と自称したと考えている。そのため、「假后童氏」と表現しているのかもしれない。

なお、福王弘光帝の旨に「即ち旨に遵いて嚴刑とし、來歴并せて主使撥置(首謀してそそのかす)の人を訊問(取り調べる)せよ」とあったことを伝える。これは、(1)で検討した陳潛夫たちのことを指していると考えられる。

④錢澄之

錢澄之(初名は秉鐙、字は飲光、号は田間。安徽桐城の人。明・萬曆四十年(一六一二)四月二十九日～清・康熙三十二年(一六九三)九月一日。明の諸生)は、「南渡三疑案」において、童氏を「僞妃童氏」とするが、福王弘光帝とかかわりのあった女性であると考えている。

・・・「僞妃童氏」の事有り。内臣の屈尚忠・錦衣衛の馮可宗に命じて嚴しく鞫問(取り調べ)を加う。童氏 初め河南より至り謬(詐偽)りて「上(福王弘光帝)の元妃爲り」と云う。廣昌伯の劉良佐 妻子をして迎候(出迎え)し、其の始末を詢わしむ。之を言うに鑿鑿(はっきりとする)として據有り。[劉]良佐 之を奉ずること后の如くし、儀を以て送りて都下に至らしむ。上(福王弘光帝) 内にせず、鎮撫に下して拷問(拷問して取り調べる)せしむ。乃ち招して「係れ周王の妃なり。誤りて周王の帝と爲ると聞く。故に謬認するのみ」と。上(福王弘光帝) 初め德昌王に封ぜられ、黃氏を娶るも早薨す。繼は李氏、再び繼は童氏。王妃に封ぜらる。子を生むも育たず。洛陽^{せめおと} 陷され、民間に逃れ、王(福王弘光帝)と相い失う。太妃及び妃 各々人に依りて自活す。太妃の南するや、巡按御史の陳潛夫 奏するに「妃 故より在り」と。上(福王弘光帝) 問わず。是に至り自から巡撫の越其傑の所に詣り、本末を具陳(詳述)す。劉良佐 以て聞し、上(福王弘光帝) 大いに愠る。既にして至り、諸を獄に下す。[童氏を取り調べた]馮可宗 其の病むを奏すれば、猶お命じて之を善視(充分な待遇を加える)さす。童氏 獄に在りて、細かに入宮の月日及び相い離るるの情事を書し甚だ悉くし、「某月日を以て城陷ち、争いて宮を出で、妾は具饌し帕を封じて上(福王弘光帝)の頭を裹み、牆を踰えて逃る。今 我を忘るるか」と云う。[馮]可宗に之を轉達するを爲すを求む。上(福王弘光帝) 棄去し顧視(見舞う)せず。屈尚忠に命じて酷刑を加えしむ。[童]氏 號呼詛詈(大声で叫び罵る)し、尋いで獄中に死す。或いは云う、獄に在りて未だ死なず。南都 陷られ、終わる所を知らず、と。[さらにまた]、「童氏は周府の宮人にして、亂を逃れて尉氏縣に至り、上(福王弘光帝)に旅邸で遇い、相い依りて一子を生む。[その子は] 已に六歳なり。賊 京師を破り、上(福王弘光

帝) 南奔し、各々相い顧みず。[童]氏 遂に身を民間に委ぬ」と言う有り。馬士英 上(福王弘光帝)に童氏を迎えて宮に入れんことを勧め、河南撫按に密諭して皇子を迎致し、以て臣民の望を慰め、以て奸宄^②(災いを起こそうとする)の心を消さんとす。[しかし]上(福王弘光帝) 聽^{ゆる}さず。劉良佐 奏するに、「童氏は實に假冒に非ず。[これは] 彝倫(道理)の係る所なり。曲全(不満足ながら丸く収める)を賜うことを懇う」と。上(福王弘光帝) 諭して「童氏は妖婦なり。朕(福王弘光帝)の結髮(妻子)を冒(詐称)す。朕(福王弘光帝) 初めは郡王と爲り。何ぞ東西の二宮有らんや。供に據るに「係れ熙寧王^③の宮人なり」と、尚お未だ其の眞偽を悉さず。朕(福王弘光帝)の宮闈(后妃)は風化の係る所なり。豈に妖婦の闖入を容れんや。法司 即ち情節(事の経緯)を示し、以て羣疑を息せ」と(『所知錄』卷五・「南渡三疑案」条:『藏山閣文存』卷六・雜文・「南渡三疑案」とは少し異同がある)。

①明朝の規定上、童氏が妃に封ぜられたのならば「繼妃」となるが、洛陽陥落までは李氏が「繼妃」であったため、童氏が「繼妃」であった可能性はひくい。ただし、生まれた子供が十歳になっていて「郡王」に封ぜられていたならば、「次妃」となっていた可能性はある。詳しくは(3)で検討する。

②『書經』舜典に「蠻夷猾夏、寇賊姦宄(蠻夷 夏を猾し、寇賊 姦宄す)。

③『國榷』では、「熙陵王」に作る。いまのところ「熙寧王」・「熙陵王」ともに該当する王族は見出せない。顧炎武『聖安皇帝本紀』でいう「邵陵王」(太祖洪武帝の第五子の周定王朱橚の子孫)の誤写かもしれない。

偽妃童氏の事があった。内臣の屈尚忠と錦衣衛の馮可宗に命じて厳しく取り調べさせた。先ず童氏が河南からやってきて、偽って「帝(福王弘光帝)の元妃です」と言った。廣昌伯の劉良佐は妻に命じて童氏を出迎えさせ、その顛末を尋ねさせたところ、はっきりと拠り所があった。そこで、劉良佐は皇后のように奉って、儀仗を整えて送って南京に届けた。ところが、上(福王弘光帝)は後宮に入れず、鎮撫に引き渡して厳しい取り調べを行なわせた。そうすると、「周王の妃です。周王さまが帝となられたと誤って聞き、そのため[皇后になれると]誤り信じてしまいました」という自供がなされた。もともと、上(福王弘光帝)は、初め德昌王に封ぜられ、黄氏を娶ったものの早くに亡くなり、後添いとして繼妃の李氏を娶った。その次が童氏であった。[童氏は]王妃(繼妃)に封ぜられた。子供を生んだが育たなかった。王府の洛陽が陥落し、民間に逃れ、上(福王弘光帝)と離れ離れになった。皇太后と妃(童氏)はそれぞれ人に頼って生活した。皇太后が南京に行ってしまうと、巡按御史の陳潛夫が、「妃ももとよりいらっしゃいます」と奏上した。しかし、上(福王弘光帝)は問い合わせもしなかった。ここに至って、童氏は自分から巡撫の越其杰のところに行き、委細をつくして述べた。劉良佐はそれを上申した。上(福王弘光帝)はたいへん憤慨した。こうして童氏が到着すると、監獄に入れた。[童氏を取り調べた]馮可宗が、童氏が病気であると伝えれば、指示して充分な待遇を加えさせるかのようであった。童氏は、獄中で、細かく王府に入った月日と離れ離れになった状況を詳

細に書きつくして、「某月日に洛陽が陥落し、争って洛陽城を出ました、妾（童氏）は食べ物を整え、ハンカチを差し出して上（福王弘光帝）の頭をお包みし、城壁を乗り越えて逃げました。今になって、私（童氏）をお忘れになったのでしょうか」と述べた。そして、馮可宗に伝達してもらうように頼んだ。ところが上（福王弘光帝）は、捨て置き見舞おうとはしなかった。そして、屈尚忠に命じて残酷な刑罰を加えさせた。童氏は大声で叫び罵った。そうして、獄中で亡くなった。〔別に獄中で亡くならず、南都が陥落し、行方が分からなくなったともいう〕。さらにまた、「童氏は、周王府の宮人であった。混乱を逃れて尉氏縣にやってきた。上（福王弘光帝）とは旅の宿で出会い、おたがい助け合い一子を産んだ、すでに六歳になっている。そうこうして賊が北京を陥落させたので、上（福王弘光帝）は南に逃げ、お互いに散り散りになった。童氏は、とうとう民間の人に養ってもらうようになった」と言うものがいた。馬士英は、上（福王弘光帝）に、童氏を迎えて後宮に入れ、内密に河南巡撫に指示して皇子を迎え、臣民の〔世継ぎを〕望んでいる気持ちを安心させ、災いを起こす気持ちを消し去らせるべきです」と勧めた。だが、上（福王弘光帝）は、それを認めなかった。劉良佐が「童氏はほんとうに妃のかたりではありません。これは普通の道理にかかわることです。不満足ではあるでしょうが、丸くおおさめなざることをお願いします」と奏上した。それに対して、上（福王弘光帝）は、「童氏は妖婦である。朕（福王弘光帝）の妃だと詐称している。朕（福王弘光帝）は、始めは郡王であった。どうして東西の二人の正妃がもてたのか。自供によると「熙寧王の宮人です」とあるが、いまなおその真偽を尽くしていない。朕（福王弘光帝）の宮闈（後宮）は、風化（教育感化）に関わる場所である。どうして妖婦の闖入を認めることができるだろうか。こうしたことから、司法はすぐに事の経緯を提示し、さまざまな疑惑を収束させよ」と上諭を出した、という。

錢澄之は、童氏の「係れ周王の妃なり。誤りて周王の帝と爲ると聞く。故に謬認するのみ（周王の妃です。周王さまが帝となられたと誤って聞き、そのため〔皇后になれると〕誤り信じてしまいました）」という自供を引用するが、童氏は福王弘光帝の三番目の「繼妃」であったと考える。そして、福王弘光帝とのかかわりについて詳しく述べた、獄中での上申書というものを記録する。また、最初は巡按御史の陳潛夫が童氏のことを報告してくれたが、福王弘光帝政權からの反応がなかった。そこで、童氏自身で巡撫の越其杰に訴え、藩鎮の劉良佐はそれを上申したとするのである。

これに続けて、錢澄之はつぎのような意見を述べる。

〔錢澄之が〕上諭を覽るに、未だ嘗て其の假冒を斥（排除）せず、但だ「朕（福王弘光帝）の結髮^①（はじめて娶った正妃）を冒る^{いつわ}」と言うのみ。則ち繼妃の童氏爲ること疑い無し。豈に上（福王弘光帝）其の失身（貞操について）を惡み、遂に棄つること徹屣^②（破れ草履）の如きならんや。〔馬〕士英 外の訛傳（でたらめな伝聞）に據りて謂う、「係れ逆旅に邂逅し、子を生みて業已に六歳なれば、上（福王弘光帝）に迎致（猶迎請）を勸む」と。

此語 太はだ妄なり。洛陽は崇禎十四年辛巳正月を以て^{せめおと}陷さる、今の甲申を距つこと纔かに四年なるのみ。安んぞ六歳の子有るを得んや。宜しく其の足らず以上（福王弘光帝）の^{ゆる}聴さざるを動かすべきなり・・・（『所知錄』卷五・「南渡三疑案」条：『藏山閣文存』卷六・雜文・「南渡三疑案」とは少し異同がある）。

①結髪には、「成婚」・「妻子」などを意味することもあるが、直後で「繼妃の童氏爲ること疑い無し」とあることから、「元配（正妃）」の意味で理解した。

②『孟子』盡心上に「舜視棄天下猶棄敝屣也（舜は天下を棄つるを視ること、猶お^{べいし}敝屣を棄つるがごときなり）」。

錢澄之が、福王弘光帝の論を見るに、妃を称したことを否定していない。ただ、「朕（福王弘光帝）の結髪（正妃）であると冒（詐称）した」と言うだけである。つまり、後添えの妃の童氏であることは、疑いない。どうして上（福王弘光帝）は、童氏が「民間で世話になったため」身持ちに問題があったことを憎んで、ついに『孟子』にいう「破れ草履を棄てるように捨て去ったのだろうか。馬士英は、外からのでたらめな伝聞に従って、「旅の宿で出会い、生まれた子供はすでに六歳になっておられるのならば、その皇子をお迎えいただくよう上（福王弘光帝）にお勧めいたします」と言った。この発言は、たいへんおかしい。洛陽は崇禎十四年正月に陷落している。現時点の甲申（崇禎十七年）からわずかに四年しかたっていない。どうして六歳の子供がいるのだろうか。馬士英は、その矛盾しているところを指摘して、上（福王弘光帝）に翻意を促すべきであった、という。

錢澄之は、童氏は福王府のあった洛陽で「繼妃」李氏に続いて「繼妃」となったと考える。ただし、子供がいたということは否定する。

（つづく）